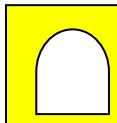


# 日吉台地下壕保存の会会報



第146号  
日吉台地下壕保存の会

## コロナ禍の中の保存の会

会長 阿久沢 武史

新型コロナウイルスによって、私たちの会も大きな影響を受けています。出口が見えそうで見えない、近くなるはずがいつまで経っても近づかない、時刻表から大幅に遅れたバスを待っているような、言いようのないもどかしさを感じます。それでもじっと待つしかありません。

昨年は3月から半年以上にわたって、見学会はもちろんのこと運営委員会やガイド養成講座、ガイド学習会など一切の活動を休止せざるをえませんでした。会員の皆さまのご理解によって定期総会を会報の誌上で行い、平和のための戦争展や講演会、バスツアーなど、毎年恒例の行事はすべて中止となりました。運営委員会の再開は9月15日、そこから少しづつ動き始め、現在に至っています。壕内の見学は慶應内の研究・教育活動に限られ、講演会など大人数での集会もしばらくできそうにありません。それでも会報を定期的に発刊できたことは、活動を止めることができなかつた証しになると思います。

今年度もまた定期総会を会報にて行います。二年連続で異例の形となります。ご理解いただき存じます。一年間の活動全般に関しては、本号掲載の活動報告をご覧ください。会を取り巻く厳しい状況については、決算報告が如実にそれを示しています。見学会が実施できなかつたため、見学会資料代が一昨年(2019年度)の519,840円から0円となり、入会をお説きする機会も失うことになりました。会員総数は一昨年に比べ減少しており、このままの状態が続けば、会の活動は必然的に先細りとなってしまいます。その意味で、発足以来の危機に直面していると言つていいのかもしれません。

私たちは自立した市民の会として、会員ひとりひとりの主体的な意思によって集い、誰に指示されるでもなく、誰に頼るでもなく運営されています。このような状況だからこそ、まずは個人の単位で無理をせず、できる範囲で取り組んでいくことが肝要かと思います。振り返って会の結成に際し、当時会長をされていた永戸多喜雄さんが会報の第1号(1989年5月)で述べられた次の言葉が思い起こされます。

きわめて穏和だが、平和への熱い想いを胸に秘めた周辺の市民が、一つの目的のために、この会を結成したこと自体、数年前に地下壕調査を思い立ち、細々と活動を続けてきた私たちにとっては、当初は夢にも考えなかつた劃期的な出来事です。

### 【目次】

<u>卷頭言</u> 【1-2p】	コロナ禍の中の保存の会	会長 阿久沢武史
<u>報告</u> 【2-5p】	第33回日吉台地下壕保存の会・定期総会(議案)	
<u>歴史散策</u> 【5-7p】	谷保の古墳・史跡・戦争遺跡めぐり ガイド 佐藤由香	
<u>報告</u> 【8p】	4.27日吉学のガイド	ガイド 岸本 正
<u>寄稿</u> 【8p】	ガイド養成講座を終えて	14期受講者 鹿村洋人
<u>寄稿</u> 【9p】	日吉の戦争遺跡ガイド養成講座を受講して知ったこと	14期受講者 酒井昭規
<u>連載</u> 【10p】	日吉第一校舎ノート(21) 若き日の詩人たちの肖像(1)	
		会長 阿久沢武史
<u>見学</u> 【11p】	野比海岸に「伏龍」特攻隊跡を訪ねて 運営委員 山田 譲	
<u>連載</u> 【12-14p】	日吉地下壕設備アコレ(30) 戦時中のトンネル工事の実際	運営委員 山田 譲
<u>思い出</u> 【14-15p】	近所の人から聞いたこと	運営委員 渡辺 清
<u>報告</u> 【15p】	第26回平和のための戦争展 in よこはま	
	平和のための戦争展 in よこはま事務局・本会会員 吉沢てい子	
<u>活動の記録</u> 【16p】	2021.3~6	副会長 喜田美登里

どのような想いを胸に、何のために活動するのか。会の出発点となったこの言葉を、ここであらためて確認したいと思います。

PCR検査、クラスター、三密、緊急事態宣言、テレワーク、変異株、……私たちの周りには、それまで聞いたことのなかったたくさんの言葉があふれています。そうした地上の喧騒とは裏腹に、地下壕は何も変わらず深い闇の中で静かに眠っています。「保存」という観点から見れば、実はそれは好ましいことなのかもしれません。

## 報告

### 第33回日吉台地下壕保存の会・定期総会(議案)

今年度の総会は、新型コロナウイルス感染防止の観点から、会員の皆様にお集まりいただく形ではなく、本会報を通じての議案提示とさせていただきます。以下にお示しする報告と提案をご確認いただき、ご意見やご質問等がございましたら、6月30日までに本会報の末尾に記載の連絡先(亀岡・喜田)までお知らせください。それを受け運営委員会で審議し、次号掲載の内容をもって議案成立といたします。

## ☆2020年度活動報告

◇会員数：個人298名 交換・寄贈団体：94団体

◇第32回定期総会：

2020年6月13日(土)発送の会報142号にて議案書提出

2020年8月21日(金)発送の会報143号にて議案書ご了承の報告

◇運営委員会開催：2020/7~12 5回

◇会報発行：4回 142号(2020.6/13)～145号(2021.3/19)

◇地下壕見学会：2020/11～12 2回 124人

◇ガイド学習会：2020/9 ギャラリー&スペース弥平

2020/11 箕輪町集会所

2021/3 日吉地区センター

◇第25回2020平和のための戦争展inよこはま：神奈川県民センター

2020/10.10(土)特別企画「核・宇宙・環境」 11(日)：特別企画「戦争・空襲」

今回、展示は無くホールでの講演のみ。コロナ対策のため定員をホール収容人数半分の130名としました。両日共、定員一杯の参加がありました。朗読劇の日吉台中学校演劇部の皆さんも出演後退出。

◇第14期ガイド養成講座

2020.10/3(土)第2回 慶應キャンパス外周フィールドワーク

当初、3月予定であったがコロナ下で延期となっていました。地上の戦争遺跡を中心として、更には日吉キャンパス内及び周辺にある古代・中世・近世の遺跡も含めたコースを実践。参加者は受講者3名とガイド5名。

2020.11/7(土)第3回 戦争体験を聞く(箕輪町集会所にて)

「東京大空襲・亀戸にて」二瓶治代さんよりお話をいただきました。

2020.12/5(土)第4回(日吉地区センター中集会室にて)ようやく第4回を終了。受講者3名に亀岡副会長から修了証をお渡しすることができました。

◇小池汪写真展「戦後75年 戦争暮らし」(川崎市平和館) 2020.10/7(水)～30(金)  
当会も協賛。

◇2021.2/25(木)日吉台小学校の出前授業の打ち合わせ(日吉地区センター中集会室)  
日吉台小学校先生方との打ち合わせ(日吉台小学校)

◇2021.3/1(月)授業「日吉台地下壕」日吉台小学校6年生88名(日吉台小学校体育館)  
パワーポイントで説明。ガイド6名が参加。

## 2020年度 決算報告

(単位 円)

費目	2020年度予算	2020年度決算	備考
【収入の部】			
会費	300,000	257,320	188名
見学会資料代	500,000	0	
図書等頒布	100,000	0	
寄付金等	0	18,797	
ガイド講座受講料	0	0	
繰越金	548,875	548,875	
計	1,448,875	824,992	
【支出の部】			
運営費	160,000	65,194	各種会合・打ち合せ等
事務費	120,000	38,915	事務用品費等
印刷費	100,000	64,850	会報・資料等
通信費	300,000	239,197	会報送料等
図書資料費	100,000	0	参考書籍・販売書籍
交流・交通費	100,000	16,000	全国集会・各平和展賛助金等
謝礼	80,000	10,000	講演・学習・調査等
冊子作成費	200,000	0	
予備費	288,875	0	
小計		434,156	
差引残高		390,836	次年度繰越金
計	1,448,875	824,992	

以上の通り報告します。

2021年5月10日

日吉台地下壕保存の会

会計 亀岡 敦子



この報告により收支を監査したところ、適正に処理されていることを認めます。

会計監査 熊谷 紀子



会計監査 山口 圓子



## ☆2021年度 予算(案) (単位 円)

## 2021年度 予算(案) (単位 円)

費目	2021年度予算	備考
【収入の部】		
会費	300,000	
見学会資料代	500,000	
図書等頒布	100,000	
寄付金等	0	
総額	390,836	
合計	1,290,836	
【支出の部】		
運営費	160,000	各種会合・打ち合わせ等
事務費	120,000	事務用品費等
印刷費	100,000	会報・資料等
通信費	300,000	会報送付等
図書資料費	100,000	参考書籍・販売書籍
交流・交通費	100,000	全国集会・各平和展賛助金等
謝礼	80,000	講演・学習・調査等
冊子作成費	200,000	
予備費	130,836	
合計	1,290,836	

収入の部の会費は前年度実績をもとに計上しました。

2021年6月18日

日吉台地下壕保存の会 運営委員会

☆2021年度日吉台地下壕保存の会  
運営委員・会長・副会長・会計監査・顧問(案)

会長 阿久沢 武史

副会長 亀岡 敦子 喜田 美登里

羽田 功

運営委員 石橋 星志

上野 美代子

遠藤 美幸

岡上 そう

岡本 秀樹

岡本 雅之

小山 信雄

佐藤 宗達

佐藤 由香

田中 剛

谷藤 基夫

福岡 誠

宮本 順子

茂呂 秀宏

山田 譲

山田 淑子

渡辺 清

会計監査 熊谷 紀子

山口 園子

顧問 櫻井 準也

鮫島 重俊

中沢 正子

## ☆2021年度 活動方針(案)

新型コロナウイルスの影響で、今年度も会の活動が大きく制限されることが予想されます。このような中でも、出来る限りの活動を継続していきます。感染防止対策を徹底しながら、運営委員会の定期的な開催、見学会のガイドや学習会、資料集の作成などを進めます。

昨年度は日吉地区の小学校に出向き、地域の歴史学習や平和学習の一環として日吉台地下壕を解説しました。壕内の見学ができない中での新しい試みでもありました。これまでの聞き取り記録をまとめた「日吉台地下壕保存の会資料集2」の完成に向けて準備も進めています。

以上のように、2021年度の活動は新型コロナウイルスの影響を受けることが想定されますが、活動方針および予算案は例年と変わらない内容とし、以下のように提案します。

### 活動方針

- 文化財指定早期実現を文化庁・神奈川県・横浜市に働きかけ、地下壕を保存する。
- 慶應義塾・横浜市・神奈川県・国への働きかけを、港北区民をはじめとする地域住民と協力して行う。
- 小・中・高校生及び広く一般市民などに対して平易でわかりやすい見学会を実施する。
- 戦争遺跡保存全国ネットワークの会員団体として、全国的な保存活動に参加する。
- 日吉台地下壕見学会の内容をより充実させるために、ガイド養成講座・講演会・学習会を開催し、運営する。
- 横浜・川崎平和のための戦争展を開催する。
- 神奈川県内の他団体と連携し、日吉台地下壕についての展示や講演を行う。
- 日吉台地下壕の調査・研究を深める。
- 運営委員会の活動をより一層充実させる。

### 歴史散策

### 谷保の古墳・史跡・戦争遺跡めぐり

ガイド 佐藤由香

4月20日(火)、「国立・谷保の古墳・史跡・戦跡フィールドワーク」に参加しました。当時はお天気にも恵まれ、5人が南武線西府駅に集合。2009年に開業した新駅を出るとすぐ目の前に御嶽塚古墳が現れました。6~7世紀初頭築造の直径25mの円墳です。頂上には安政5年(1858)建立の小さな祠があります。御嶽大権現を祀る碑文に、この丘陵地が長い間信仰の対象であったことがうかがえます。

次に武藏府中熊野神社古墳へと向かいました。熊野神社境内に広がる上円下方墳は復元整備され、1350年前の姿を見るすることができます。四角い墳丘の上に丸い墳丘が重なった三段構造は全国的に珍しい形状。1段目は一辺32m、外周は縁石で囲まれています。2段目は一辺23m、3段目は直径16mの大きさで川原石に覆われたドーム型になっています。

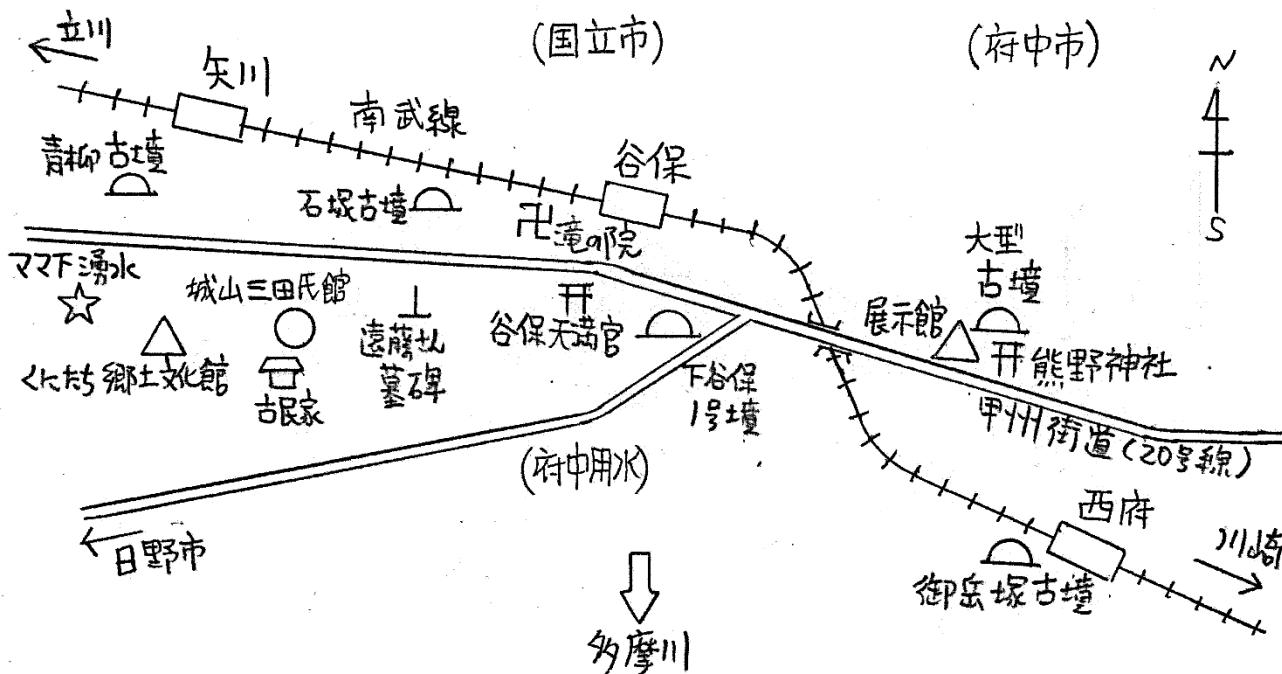
石室からはガラス玉、刀子等が出土。中でも注目は鞘尻金具(太刀の切先部分を保護するために鞘尻に装着された環状の金具)です。日本最古の通貨「富本錢」にも見られる七曜文(中国の陰陽五行思想で太陽や月など7つの星を表現した文様)が銀象嵌で刻まれています。被葬者は不明ですが、武藏国府設置直前に大きな力を持っていた人物の墓と考えられています。隣接の展示館では写真パネルや歴史年表、古墳の土層標本や石材を見ながら学ぶことができます。古代浪漫に想いを馳せられる素敵なお場所でした。

続く3ヶ所目の古墳は国立インター交差点近く、住宅街にひっそりと存在しています。1985年に発掘調査が行われた下谷保一号墳です。現在は埋め戻されていますが、河原石積みの横穴式石室が天井付近まで残存しているそうです。

そこからは、立川崖線沿いを散策して地形や水の流れを観察しました。崖線とは多摩川の作った河岸段丘の崖で線上に長く続く崖なので「崖線」と呼ばれています。JR青梅駅付近から立川市内を抜け狛江市元和泉付近まで続く約40kmの崖線。「崖線」は武蔵野の方言で「ハケ」「ママ」とも呼ばれます。「ハケ」では武蔵野台地に降った雨水が地下に浸透し豊富な湧き水がいくつもあります。ちょうどせせらぎに遊ぶカルガモを見つけ、みんな夢中でカメラを向けました。時にはカワセミにも出会えるそうですよ。

次いで谷保天満宮梅園で、お弁当を広げました。谷保天満宮は地元では～やばてん～と呼ばれ親しまれています。903年に菅原道真の三男：道武が創建。亀戸天神・湯島天神と並び関東三大天神に称されます。立川崖線とひとつ南側の青柳崖線の合流地点にあり、甲州街道から石段を下って境内に入していくという珍しい構造です。1908年8月、有栖川宮威仁親王が国産初のガソリン自動車など11台で隊列を組んだ遠乗会（ドライブツア）の目的地とされました。「交通安全祈願発祥の地」と言われる所以です。境内には慰靈碑と彰功碑があります。慰靈碑（1956年建立）正面には慰靈碑の文字、裏面には国立町の戦争犠牲者292名の名前と「人間がたがいに信じあい愛しあうこころの花束をつつしんでここにささげる」と彫られています。彰功碑（1906年建立）の正面には日露戦争における谷保村従軍者56名の彰功文。裏面には戦死者3名、病死者5名と凱旋者48名の氏名が彫られています。ガイドの山田さんからは、前者は兵士・民間人を問わず戦争犠牲者に対する慰靈。後者は軍功を表彰するもので、同じ戦争関係碑でも、意味合いが全く違うと教えて下さいました。石碑に込められた意味や、時代背景を踏まえながら考察することが大切だと思いました。

次に滝の院墓地を訪れました。山田さんの墓石調査によると谷保村戦死者21人中、1944年9月以降の戦死者は14人で67%を占めます。私達が地下壕をご案内する際に「アジア太平洋戦争日本の戦没者は約310万人、そのうち最後の1年間で200万人の方が亡くなりました」とお話しますが、その数字（64.5%）とも重なります。滝の院でもう一つ忘れてならないのは、かつてB29搭乗員の遺骨が保管（戦後、故国に返還）されていたことです。1945年8月8日B29爆撃機69機が武蔵野町の中島飛行機武蔵製作所を空襲。うち1機が日野高射砲陣地に撃墜され谷保村に墜落、空中分解した機体前部は谷保村青柳の多摩川堤防付近に落下。機体後部は谷保天満宮南方の三屋（現府中市）に落下し乗員12名のうち10名死亡。亡くなったり10名は村民らの手によって滝の院に埋葬されますが、この話には凄惨な続きがあるのです。パラシュート降下した2名は捕虜として立川憲兵分隊に収容。そのうちの一人（セラフィン・モロン軍曹）は分隊長の指示で錦国民学校（現立川市立第三小学校）に連行されます。軍曹は背中を向けて両手を広げ、目隠しをされ手足を杭に縛りつけられました。





武藏府中熊野神社古墳



谷保天満宮の戦争犠牲者慰靈碑

校庭に集まった数百人の市民から2時間にわたって竹の棒で殴打されました。空襲警報発令により私刑は打ち切り、憲兵隊は傷ついた軍曹を近くの正樂院の市営墓地に運び込みます。堀った穴の前に軍曹を座らせて技術将校が斬首し、その場に埋めました。敗戦後、発覚を恐れた憲兵隊は遺体を掘りおこし火葬、医師に「墜落死」と死亡証明書を書かせるなど証拠隠滅を図ったものの事件はアメリカ軍の知るところとなります。老婆やこどもも加わったこの事件は長い間タブーになっていたそうです。山田さんの配布資料『この悲しみをくり返さない—立川空襲の記録III』(立川市文芸同好会編・著)冒頭の一文が私の胸に重く響きました。

“この事件は30年前の過去の事件ではあるが、人間について、戦争について現代に生きるわれわれも、深く考えなければならない数多くの問題を含んでおり、それらは30年の歳月の向こうからわれわれに問いかけています”。

さて歩いて4ヶ所目となる古墳は「石塚古墳」です。住宅街にぽっかりと浮かぶ小山は東西10m、南北15m、高さ1.8mの円墳です。上り口にはしめ縄が飾られた鳥居と愛らしい道祖神が配置され、頂上には2つの祠があります。周囲にはツツジや藤も咲いてとても明るい雰囲気。近隣の方に大切にされている場所と感じました。

続いて、東部62部隊出征者墓碑を訪ねました。終戦前に川崎市宮前区を中心に駐留した東部62部隊は記録が少なく、元兵士の墓碑は大変貴重な発見だそうです。農家敷地に父親が建立した墓石には「故陸軍伍長 遠藤峯作 昭和二十年七月一日戦死 行年二十五才」。背面上には昭和17年東部62部隊入隊、旧満州北部ソ連国境近くに駐屯後、フィリピンレイテ島に上陸しカンギポット山戦闘にて戦死した旨と戒名が記されていました。

次に谷保の城山へ向かいました。「城山」は青柳段丘を利用した中世城郭跡です。この地は「三田城」あるいは「三田氏館」と呼ばれ中世三田氏との関係が推測されてきましたが、鎌倉御家の津戸三郎為守が城主との説もあります。土壘と空堀により方形に廓が作られています。新緑が美しい森で二輪草が可憐な花を咲かせていました。

次にくにたち郷土文化館に行きました。縄文時代中期の遺物遺構～文教地区制定まで国立の歴史や自然・文化の展示スポットです。常設展は「ハケが育んだ国立の歴史」がテーマ。まさに本日フィールドワークの振り返りにピッタリの場所でした。

文化館を出た後は「ママ下湧水」まで歩きました。東京都の名湧水57選にも選定され、昭和初期まではワサビ田も見られた湧水地は今も透明な清水があふれています。人の暮らしと自然がともに生きる里山の姿を感じることができました。

最後になりましたが、企画・引率して下さった山田さん、本当にありがとうございました。地域にまつわる戦争のお話始め、ブラタモリ要素、古代ロマンと盛りだくさんでした。そして淑子さん、天満宮にちなんだ地元銘菓「ゆすら」ご馳走様でした。美味しかったです！

山田譲・注記——この「国立谷保史跡めぐり」は、何人かの方にお声をかけ、私の自宅付近を地域の歴史散策としてご案内いたしました。

**報告****4/27 日吉学のガイド**

ガイド 岸本 正



4.27 日吉学見学会

久々の大学生対象ガイドは少人数、数人の班×5班で行われた。

来往舎シンポジウムスペースを16時半、班ごとに若干の時差をつけて出発。冒頭、学生たちとの顔合わせでは「こんな講座を受講できる君たちはラッキー、私のころは地下壕の存在すら知る機会は無かった」とお話し、塾高出身者、地方出身者を含む5名をご案内。これくらいの人数だと「ぼくも文学部なんです」とか「塾長変わるんだってねえ」とか会話を交わしながら和気あいあいとガイドを進行できています。一連の事前学習の成果なのか、真剣に話を聴いているし所々で質問したりしてモチベーションの高さが伺われた。いつもと違い、見える事物をもとにしてできるだけ短時間、ピンポイントで解説する。また、地上・壕内とも従来のコースを一部変更し効率的に巡回。私は今回初めてオリンピック坂から寄宿舎に向かう。通信室と作戦室では全体解説。壕内での印象を聞くと、各々フルに想像力を働かせ歴史の舞台を踏んだ感動が伝わる。チャペルを経て、最後は第一校舎前で建築の特徴を聴き約100分にわたる見学会は終了した。

キャンパスに遺る戦争遺跡と上原良司の言葉は、彼ら学生たちの心に何かしら訴えるものがあったはず。それら種蒔きのお手伝いができたことに達成感・充実感をもつことができた。さらに、リアルな対面での解説の効果をあらためて感じたガイドだった。

**寄稿****ガイド養成講座を終えて**

第14期ガイド養成講座受講者 鹿村洋人

私が日吉台の地下壕に初めて入って見学したのは、2005(平成17)年でした。当時、慶應高校の社会科教諭として3年生の卒業研究を担当しており、フィールドワークの一環として企画し、地下壕保存会の新井揆博氏にお願いして生徒達と一緒に地下壕を案内して頂きました。その後も数年続けて見学を行い、回を重ねるごとに地上の現高校校舎、南側グラウンド脇の教会堂、大学寄宿舎を含めて、海軍連合艦隊の中核としていかに重要な役割を果たしていたかということを認識させられました。また大東亜戦争末期にこの地下壕の司令部から発せられた命令によって多くの特攻作戦が実施され、それにより戦死された将兵の話を伺い、この場所は時代の「証人」としての存在意義がじつに大きいものであると思いました。

三年前に塾高を定年退職して時間の余裕ができたので、今度は自分が地下壕のガイドになってお手伝いしてみたいと思い、昨年の養成講座に参加しました。四回の講座では戦争関連以外に日吉周辺の歴史遺跡についても教えて頂き大変勉強になりました。さらに長年にわたり保存会員の皆さんのが調査・研究されてきた成果である資料を拝見して新たな知識を得ることができ、大変感謝しております。特に印象に残ったのは、子供の時に東京大空襲を体験された二瓶和代さんのお話でした。銃後の市民にも多大な犠牲者を出した空襲の実態が二瓶さんの口を通して語られ、人間も動物も焼き尽くす焼夷弾の恐ろしさが伝わってきました。

現在もシリア、パレスチナその他の地域紛争においてミサイルによる空爆で子供を含む多くの人々が死傷するニュースを見る度に、憎しみの連鎖が続く限りは世界から戦争が無くなる日は永遠に来ないのでという気持ちになります。私を含む戦後生まれの日本人は75年間平和が保たれた恩恵を享受してきましたが、日吉台地下壕の意義を多くの方に伝える活動を通して私自身もこれから思索を深めていきたいと思っています。

寄稿

## 「日吉の戦争遺跡ガイド養成講座」を受講して知ったこと 第14期ガイド養成講座受講者 酒井 昭規

### 1. 慶應日吉キャンパス内に残る地下壕跡が「帝国海軍連合艦隊司令部」だったこと

23年前に日吉に住み始めた頃から、慶應日吉キャンパス内に戦時中の防空壕？が残つておりその見学イベントが行われているとの新聞記事を見て以来、気にはなっていましたが、これまで阿川弘之「米内光政」や宮野澄「最後の海軍大将 井上成美」など太平洋戦争末期の海軍関連の小説を読んでいたにも関わらず、このことは全く頭に残っていませんでした。連合艦隊司令部は主力艦隊の旗艦（戦艦大和や武藏）に置かれるものという先入観があったからか、文中にさり気無く登場したのにスルーしてしまったに違いありません。また、日吉に移転する前の最後の艦上司令部が戦艦「大和」でなく軽巡洋艦「大淀」にあったことも意外でした。

### 2. 現在の地下壕見学用出入口は2001年3月に設けられたもので、それまで10年余りは民家からの入口1カ所しかなく、また土砂のため長靴で入るしかなかったこと

慶應義塾の協力による地下壕内の環境整備（戦後半世紀にわたって流入していた大量の土砂を取り除き、水路に蓋をつけ、50カ所にランタン型蛍光灯を確保）で、日吉キャンパス内マムシ谷テニスコート脇に出入口ができたため地下壕見学が安全にスムーズにできるようになりました。慶應義塾の当会に対する姿勢が好意的だったことがわかりますが、最近はどうでしょうか？

### 3. 当会と同じような戦争遺跡保存活動を行っている団体が全国にあり、「戦争遺跡保存全国ネットワーク」として合同シンポジウム等のイベントを開催していること

皇居も含めた首都機能全体を長野県長野市松代に移転する大規模な遷都計画が戦争末期（1944年9月）に着手されたが未完に終わったこと、その「松代大本営の保存をすすめる会」から上記全国ネットワークの活動がスタートしたことも初耳でした。

以下、軽い自己紹介など

母方の叔父が「水交会」関係者であることもあって、帝国海軍にはそれなりに関心をもっており、歴史書NHKスペシャル取材班「日本人はなぜ戦争へと向かったのか」や阿川弘之の小説などを読みましたが、当会に関係することになり改めて、だいぶ前に読み始めたけれども「やましい沈黙」で中断していた「日本海軍400時間の証言 軍令部・参謀たちが語った敗戦」というNHKスペシャルをまとめた400ページの力作に再度取り組んでいます。

当会ではいわゆる15年戦争の最も悲惨な最後の1年、日吉に来てから終戦までの帝国海軍連合艦隊司令部の戦争遺跡により、文献や映像とは一味違う現物（本物）に接することで得られる感覚を重視した見学会を実施できることが存在意義だと思います。



白い紫陽花

**連載**

## 日吉第一校舎ノート (21) 『若き日の詩人たちの肖像』 (その1)

会長 阿久沢 武史

昭和11年(1936)2月25日、堀田善衛は大学受験のため金沢から上京した。二・二六事件の前のことである。のちに「戦後派」の作家として芥川賞を受賞する17歳の少年は、戒厳令下の雪の夜、兄の下宿で受験参考書を開く。『若き日の詩人たちの肖像』(集英社文庫)には、この日の夜のことが次のように記されている。

後日二・二六事件と呼ばれる、軍隊の叛乱が起っていたのである。しかしこの雪の日に、下宿にとじこもって受験勉強をしていた少年は、夕方近くまで何事も知らなかつた。国家というものには、それが国家である以上は、内乱がつきものであるということについても、少年は何事も知らなかつた。それはいかなる国の歴史にもあつたし、これからも屢々あるものの筈であるといふことも知らなかつた。そうして国家は、そのときの时限においてその成り立ち方をくつがえそうとする者に、死を課するものであるといふことも本当には知らなかつた。町には物音はなく、雪のなかでひっそりとしていた。雪のなかでの、鼓膜を押して来る静けさには、少年は幼い頃からなじんでいた。そういう静かな、充実した時間のなかでの勉強はむしろ快いものであった。少年は国語の準備をしながら、こういうときにはブラームスかシューマンが向いている、と音楽のことばでこの内にこもった静けさを量っていた。

堀田はこの年、慶應義塾大学法学部予科に入学し、日吉の第一校舎で学び始める。開設2年目のキャンパスは、銀杏の並木も若く、新学期にあわせて第二校舎は竣工したが、寄宿舎はまだ出来ていない。

『若き日の詩人たちの肖像』は、昭和43年(1968)に発表した自伝的小説である。法学部予科に入学し、三田で文学部に転じ、フランス文学を学んで昭和17年(1942)に卒業するまでの塾生生活が描かれている。それは上京した「少年」が、やがて「若者」になり「男」になる時間でもあった。堀田はこの作品を「私」という主体が語る自己の記録(自伝)ではなく、主人公を「少年」と呼び、「若者」と呼び、「男」と呼ぶ。自らの青春を客体化して、一定の距離を保ちながら自己を見つめ直したひとつの物語(小説)であるが、ここには日吉と三田での学生生活が確かな筆致で描かれている。二・二六事件を機に、軍部はいよいよその力を強め、入学した翌年には盧溝橋事件が起こり、日本は泥沼の日中戦争にのめり込んでいった。ヨーロッパではナチス・ドイツが台頭して第二次世界大戦が勃発し、日本も国家総動員体制を強め、枢軸陣営の一翼としてその渦中に足を踏み入れていくことになる。堀田が言うように、「国家」は「その成り立ち方をくつがえそうとする者に、死を課するもの」であり、彼の青春はまさにそうした時代の中にあった。「少年」は東京で出会ったさまざまな友人との交流の中で、剥き出しの権力で思想の自由を奪う「国家」というものの生の姿を知ることになる。この静かな雪の夜に「本当には知らなかつた」ことを、いずれ「本当に知る」ことになるのである。「何事も知らない少年」は「若者」になり、「男」になっていく。軍隊の反乱が起ったこの夜の「鼓膜を押してくる静けさ」には、思想の自由だけでなく戦争によって命まで奪おうとする国家権力の騒々しい足音が内包されているかのようだ。この夜、「音楽のことば」でその静けさを量ろうとしていた少年は、やがて「文学」の言葉で自分が生きた時代を客観的に見つめていく。『若き日の詩人たちの肖像』は、国家と権力と戦争と死、そこで生きる若者たちの諦念と虚無を基調に据えながら、それでも芸術や学問の世界で何とか自己の存在の意味を探し出そうとする物語であり、戦時下に慶應で学んだ塾生のひとつの青春の形が描かれている。この少年(若者)の目に、日吉の予科はどのように映ったのだろうか。そしてそこで、この第一校舎で、いったい何があったのだろうか。

本稿は『慶應義塾高等学校紀要』第47号(2016年)に発表した拙稿「日吉第一校舎ノート(三)予科の教育(前編)」の再録となります。

## 見学 野比海岸に「伏龍」特攻隊跡を訪ねて 運営委員 山田譲

3月19日に私は中田均さんのお誘いで、横須賀市野比の人間機雷「伏龍」特攻隊の訓練基地跡のフィールドワーク(9人参加)に行ってきました。「伏龍」はご存じの通り潜水服を着た水中特攻です。

まず初めに行ったのは市立野比中学校です。ここには「伏龍」元隊員の門奈鷹一郎氏(故人)が寄贈された貴重な遺品が保管・展示されています。門奈さんが実際に着用していた防寒用のシャツとズボン下。訓練に使用したロープ。予科練の帽章、襟章など。陶器製手榴弾(自決用)。野比中学校での門奈さんの講演原稿。そして門奈さんと予科練同期の小林武氏が制作した伏龍隊員像です。この展示は教員室の脇に展示してあって、生徒はいつも見ていますが一般の人は出入りできませんので貴重な機会でした。河野和代校長先生にご案内いただきました。

その後、野比海岸に出て、野比訓練基地のあった一帯を歩きました。ここには野比海軍病院(現在は久里浜アルコール症センター)があって、その東西の海岸の所に伏龍訓練実習場が2カ所あり、陸側に兵舎がありました。ここは横須賀市追浜在住の猪股浩さんにご案内いただきました。海岸に出る手前には「東京湾要塞」と記された石の境界標があり、以前、大きなトーチカが残っていた所は今は老人ホームになっていました。

病院の東側の丘の脇にはコンクリート製の地下壕出入口が3つありました。これは中の方でつながっていて、ヨの字型になっているものと思われます。一番北側の出入口には鉄扉が付いていて、めずらしいなと思いました。この地下壕の由来・用途は不明です。海軍病院のものかもしれません。

次に横須賀軍港の北側の田浦コミュニティセンターに移動し、神奈川大学歴史民俗学教授の坂井久能さんのお話をうかがいました。国道16号線を渡った向かい側(海側)には東芝ライテックの工場があります。ここは海軍工廠造兵部があった所で、当時の立派な建物、庁舎製図工場などが現存しています。そして造兵部の向かい側(コミュニティセンター側)には、職員、工員のための飲み屋・赤線街である皆ヶ作銘酒屋街があったとのことでした。この街区には当時の面影をとどめるシャレた洋風の建物が今も残っており、ちょっと不思議なタイムスリップしたような空間でした。

さらに田浦の自衛艦隊司令部(連合艦隊司令部の今日版?)の脇を通ると、敷地内の工事現場に赤レンガ製の大きな地下壕が顔をのぞかせていてビックリです。横須賀はどこもかしこも戦争遺跡だけです。

なお門奈鷹一郎さんは『海軍伏龍特攻隊』(光人社 NF文庫)を書かれています。今も再版されています。隊内の激しいバッター制裁(「海軍精神注入棒」による臀部殴打)の話も出てきます。以前、私たちがお話を聞いた学徒出陣の伏龍隊員・岩井忠正さん(少尉)とは違う下級兵士の世界が、くわしく書かれています。



野比中学校の伏龍像



(後側)

連載

## 地下壕設備アレコレ【30】戦時のトンネル工事の実際

——岩波全書『トンネル』他より——

運営委員 山田譲

今回は、日吉の地下壕工事の土木技術のお話です。私は古本屋で岩波全書『トンネル』という本を見つけました。著者は平山復二郎で昭和18年発行。土木工学の専門書ではありませんが、トンネルの「施工技術についての説明」を一般向けに書いた新書サイズの本です。文中、アメリカやヨーロッパの先進的なトンネル工事の話がたくさん出てきます。ひるがえって日本の遅れた土木工事技術への、筆者の劣等感のような気持ちをにじませて「後塵を拝する始末」と書いています。他面で、日本の土木工事の職人技の話もいろいろ出てきます。そういう土の匂いがする本です。

もう1冊、『日本の土木技術 100年の発展のあゆみ』(社団法人・土木学会 昭和39年発行)という本も古本屋で見つけました。これは戦後に書かれた、かなり専門的な本です。私は土木工学の素養はないので素人なりの理解ですが、この本も参考にしながら、わかったことを紹介したいと思います。

**(1)当時のトンネル工事の手順**

この本に書かれているトンネル工事は、おもに鉄道トンネルや道路トンネルです。しかし書かれていることは日吉の地下壕工事にも、そのまま適用できるものです。たぶん設営隊の技術将校たちも、こういう本を読んで勉強したのでしょうか。

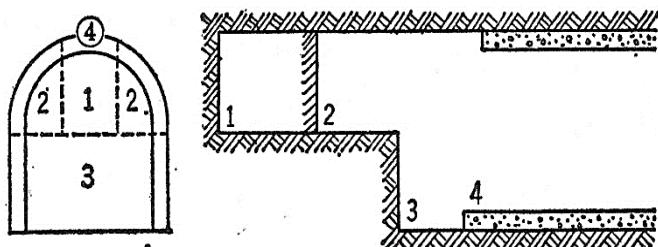
トンネル(地下壕)を築造するためには、①まず、測量、設計です。そして穴掘りです。これは「掘削」と呼ばれます。掘り出した土砂・岩石は外に運び出します。これを「ズリ出し」と言います。②次に、掘った穴が当面、崩れないように仮の内面補強が必要です。これは「支保工」と呼ばれます。③さらに、穴の内側にしっかりした壁・天井を施工します。これは「覆工」(ふくこう)と呼ばれます。覆工にはレンガ積みのようなブロック積みもありますが、日吉の地下壕では大部分はコンクリート打ちです。この場合は型枠工事と生コンクリートの流し込み、さらに型枠の取り外しという作業手順になります。

「工」というのはこの場合、工事という意味ですので、これらは支保工事、覆い工事ということです。普通は「電気工」「土工」というように、作業者という意味で「工」という言葉を使うことが多いと思います。ですので「支保工」「覆工」という言葉は、トンネル土木業界用語ですね。

**(2)測量・掘削・土砂搬出**

はじめに地形図を見て、さらに地形の測量をして、地下壕の設計図面をつくります。測量は工事中も、掘り進む方向と高さを定めたり確認するために必要です。そのための器具は巻尺と、「トランシット」と呼ばれる角測器、「Yレベル」と呼ばれる水準測量用器具です。日吉の地下壕通路の勾配・傾斜は100分の2(100m進むと2m下がる)位に造られています。これは地下水の排水のために重要です。また台地の両側から穴掘りを進めるので、正確に測量しないと両方の穴掘りが「合致貫通」しません。

穴掘りは、土砂または岩を切り崩します。土は柔らかいが崩れやすい。岩は固いが崩れにくい。その点、日吉のような粘土の土質は、掘りやすく崩れにくいので穴掘りには好適です。しかし火山灰でできた粘土層と砂礫層の地層が折り重なっているので、地下水が湧き出します。そうなると崩壊しやすく危険です。実際、連合艦隊司令部の地下壕を掘る



(図1) ベンチ式掘削法——1~4の順に  
掘削施工(『日本の土木技術』より)

時に、湧水がひどくてあきらめたルートがあったという話があります。人事局地下壕では出水がひどくて工事が難航したとも言われています。崩落事故で亡くなった人もいたようです。

掘削・切崩しに使う道具はツルハシ、シャベル、ノミ、ハンマーです。固い岩に対しては削岩機やダイナマイトも使います。日吉でも爆薬を使ったようです。その場合はダイナマイトを詰める穿孔(穴あけ)が必要なので、穿孔機と動力としてコンプレッサーを使います。

地下壕内部の高さは3m以上あります。ですから下を先に掘ると天井には手が届かなくなります。それで予定の高さの上半分を先に掘り、下半分を後から掘れば、常に十分手が届く状態で掘り進められます。この掘り方を「ベンチ式」と言います。(図1)

穴掘りと同時に「ズリ出し」が必要です。この作業は単純かつ過酷な肉体労働です。日吉では朝鮮人労働者がモッコをかついで、この土砂の搬出をしていたという証言があります。また艦政本部地下壕の内部には、トロッコ用のレールの枕木の跡が残っています。トロッコを使う場合も、積込み、手押し、土砂捨ては人力です。トロッコの上部の木枠は下の方が広くなっています。木枠を持ち上げて台車の上の土砂を横に投げ落とします。(図2)

小型のトロッコなので、レールも1kg (高さ5センチほど) の細いものです。運び出した土砂は周囲の農家の田畠の上に投げ捨てられ、そのために地面が1~2m高くなってしまいました。

### (3)支保工=仮設の補強工事

地中を掘っていくと地下には土圧があるので、穴の周囲の土が膨張します。これを抑え崩落を防ぐのが支保工です。とはいえ、この膨張がゆっくりであれば、あまり問題にならないようです。支保工が必要かどうか、どういう形状がいいかは、土質や土圧、湧水の状態によるようです。

この支保工の材料は、普通は木材で松がよく使われます。特に強度が必要な時は鉄材も使われました。支保工は支柱式のものが多く、この組立ては丸太材の接合の仕方が独特で、普通の大工でなく「斧指(よきさし)」という特殊な職人が担当したそうです。日吉に来ていた鉄道工業の社員の中に、そういう親方がいたのかもしれません。支柱式のほかに、アーチ式支保工などいろいろな形がありました。

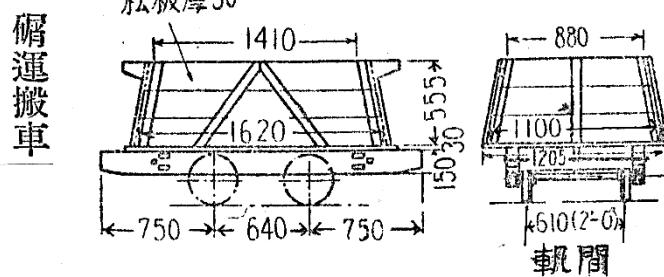
### (4)覆工=型枠組み付けとコンクリート打ち(充填)

コンクリート打ち作業に入るためには、まず、支保工を取り外して型枠を組み付けます。この支保工取り外しの時が、崩落が起きやすく危険です。型枠は現在ではほとんど鉄製ですが、戦前はふつう木製でした。日吉の地下壕はコンクリートに木目の跡が残っていますから、木製の型枠です。

型枠は側壁用と天井部用を別個に用意し、コンクリートの充填は側壁から行ないます。なお、床面のコンクリート打設は最後になるようです。天井部分の頂部のコンクリート充填が、一番むずかしい工事になります。ここは「トンネル軸の方向に後退しつつ」充填します。また「上迫(あげぜめ)」と言って、型枠の下方の穴からコンクリートを押し上げ注入して充填する場合もあるそうです。

コンクリートと天然地盤の間に隙間を残さないことが必要です。そして充填作業ではコンクリートの突き固めが重要です。これが不十分だと骨材の砂利のまわりに空気が残ってしまい、強度不良になります。

なお、地下トンネルの場合はコンクリートに鉄筋を入れる必要はありません。地下では圧縮する力はかかりますが、引っ張る力はかかりません。コンクリートは引っ張りには



(図2) 小型ズリ(土砂)運搬車—  
積載量 0.6 m<sup>3</sup> (『トンネル』より)

弱いのですが、圧縮には強いわけです。ただし出入口付近は、いろいろな方向から力がかかるので、鉄筋を入れることもあるようです。

次の作業は型枠はずしです。トンネル内は日光の直射がなく湿度が高いので養生の条件がよく、一昼夜でコンクリートは硬化するので型枠を取りはずせることです。なお動力式のコンクリート混合機は当時も広く使われていたようで、日吉でも使っていたと思います。

このコンクリート覆工作業の一例として「日本の単線鉄道トンネル」(これは日吉の地下壕に近い断面積)では、「覆工の厚さ40センチ、天井部と側壁とを別々に施工し、人力充填で混合は坑外でなす場合、型枠班は大工と手伝いで6~8人、充填班は……土方と手伝いで20~28人、昼夜作業により大体1日、延長10m程度仕上げることができる。」と書かれています。これはあくまで、まっすぐなトンネルの場合ですが、これを連合艦隊司令部地下壕にてはめてみると全長500mとして、50日でコンクリート打ちができるということになります。もちろん昼夜交替、休日なしの突貫工事です。食料も乏しい中で、つらく厳しい危険な肉体労働だったにちがいありません。

(会報121号、設備アレコレ【14】「コンクリート打設の実際」 会報123号、設備アレコレ【15】「地下壕の穴掘り作業」に関連記事があります。)

## 思い出

## 近所の人から聞いたこと

運営委員 渡辺 清

※自己紹介：日吉で生まれ育つ。父は日吉で生まれ育ち、農家の次男坊のため、農業の手伝いをするため実家近くに家を建て、いつでも手伝いできる体制での生活でした。身長たりず(150数cm)兵役ナシ。臨時工員で安立電気、進駐軍の雑用(岡本製作所跡地：アメリカ軍が駐留していた)、慶應大学日吉キャンパスの雑用(職員の板垣さんの紹介)等で生活は厳しく、母(川崎市中原区井田三舞町青山家三女)に「駄菓子屋(大黒屋)をやる様に(店舗兼住宅)、将来人口が増えるから(農家を除き五軒しか家がなかった)」との理由で。尚、兄(渡邊保男：昭和13年生、45歳で死亡)は足立寛さんおよび、小島英佑さんの弟さん(小島健次：2019.5死亡)と同級生です。戦中・戦後の自分の体験と、両親・先輩に聞いた話を思い出しながら語っていきたいと思います。



### ※母から聞いた話：

竹ヤリで訓練した、、、こんな事で勝てるのか疑問に思った。4歳上の兄がお菓子を食べていると、下級兵士がクギと交換してくれと言われた。上級兵士と下級兵士の差？貴重品(物わからず)を本家(渡邊家)に預けたら、空襲にあい焼けてしまった。自宅は空襲にあわず。

※細谷さんから聞いた話：艦政本部地下壕を作るため細谷宅数軒は強制移動させられ、途中移動を放棄。そのため石森土建にお願いし移動した。みがってな軍隊。

※金蔵寺の次の人から聞いた話：金蔵寺から大聖院に行くのに近道なので艦政本部の地下壕を通路として通っていた。

※加藤さんから聞いた話：高射砲で撃ってもB29にぜんぜん届かないのを見た。金蔵寺周辺には朝鮮人がいて、渡邊家の防空壕をさつまいもをあげて掘ってもらった。食物が無く喜んで掘ってくれた。

## 報告

### 「第26回2021平和のための戦争展inよこはま」報告 横浜大空襲から76年

事務局・本会会員 吉沢てい子

5月29日の横浜大空襲の日に合わせて開催してきた「平和のための戦争展inよこはま」は今年で26回目。5月23日と30日に講演などの特別企画をかながわ県民センターで開催しました。

5月23日の特別企画1は「戦争・空襲」をテーマに開催。横浜大空襲の中をどう逃げ惑ったか、日吉台中学校演劇部は搜真女学校や県立横浜第一高女（現横浜平沼高校）の女学生たちの姿を朗読劇で、NGOグローカリーは西区野毛山での体験者の証言を朗読しました。

法政大学前総長で江戸文化研究者の田中優子さんは、徹底した戦争回避・非戦で265年もの間、「泰平の世」や「江戸文明」を築いた「江戸」から現代に示唆するものを講演しました。

5月30日の特別企画2は「核のない世界を」をテーマに開催。今年1月22日、発効した核兵器禁止条約の成立経過や内容、そしてこれからについて、被爆者や識者の講演とともに、桐蔭学園高校・中等教育学校演劇部が探究の時間で学習してきたことを発表しました。

戦争展は、これまで、次世代への継承を位置づけ、若い人たちの発表の場を保障してきましたが、中高生たちのすばらしい発表に、改めて大事な役割を実感しました。



横浜市立日吉台中学校演劇部による朗読劇  
「少女たちの戦争—横浜大空襲」5月23日（日）



田中優子さん（法政大学前総長・名誉教授、法政大学江戸東京研究センター特任教授）による講演  
「江戸から見る」 5月23日（日）



講演者のみなさま 5月30日（日）

## 活動の記録 2021年3月～6月

- 3/19(金) 会報145号 発送(来往舎 小会議室)  
 3/28(日) ガイド学習会(日吉地区センター 中集会室)  
 4/8(木) 運営委員会(来往舎 小会議室)  
 4/25(日) 平和のための戦争展 in よこはま 準備(横浜市従会館)  
 4/27(火) 地下壕見学会 慶應大学「日吉学」学生25名・教員6名・ガイド7名  
 4/28(水) 地下壕見学会 慶應高校3年生16名・ガイド5名  
 5/6(木) 運営委員会(来往舎 小会議室)  
 5/22(土) ガイド学習会(日吉地区センター 中集会室)  
 ☆平和のための戦争展 in よこはま(かながわ県民センター2階ホール) ☆展示無し  
 5/23(日) 特別企画1 戦争・空襲(参加者240名) 朗読劇「少女たちの戦争—横浜大空襲」横浜市立日吉台中学校演劇部・報告「5月29日野毛山で—どう逃げ惑ったか」NGOグローカリー・講演「江戸から見る」田中優子さん  
 5/30(日) 特別企画2 核のない世界を(参加者160名) 発表「探求:核兵器禁止条約」桐蔭学園高校・中等教育学校演劇部・講演「被爆者の願いが条約になった」和田征子さん・「核兵器のない世界に向けて一条約の可能性と課題」山田寿典さん・「非人道兵器を禁止させたもの—地雷廃絶の経験から」目加田説子さん  
 6/3(木) 運営委員会(来往舎 小会議室)

### ○地下壕見学会について

新型コロナウイルスの感染状況下、一般の方の日吉台地下壕見学会は再開未定です。慶應義塾関係者の少数の見学は、感染対策をしながら実施しました。

★お問合せは見学会窓口まで

Tel/Fax 045-562-0443 喜田(午前・夜間)



地下壕の新しいランタンです。日吉キャンパス運営サービス課から10個頂きました。地下壕内で消耗の激しいランタンですが、安全に見学するためには30個は必要です。10個の補充はとても有り難い。  
 「白い新顔スタッフ君たち がんばってね！」

連絡先(会計) 亀岡敦子: 〒223-0064 横浜市港北区下田町5-20-15 TEL 045-561-2758

(見学会・その他) 喜田美登里: 横浜市港北区下田町2-1-33 TEL 045-562-0443

ホームページ・アドレス: <http://hiyoshidai-chikagou.net/>

日吉台地下壕保存の会会報

発行 日吉台地下壕保存の会

代表 阿久沢 武史

日吉台地下壕保存の会運営委員会

(年会費) 一口千円以上

郵便振込口座番号 00250-2-74921

(加入者名) 日吉台地下壕保存の会